

中期計画の項目	2－(4)－①	文化財情報基盤の整備・充実
年度計画の項目	2－(4)－①－1) 2－(4)－②－3)	①文化財情報基盤の整備・充実 1)国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、各種データベースを横断的に検索する総合検索を充実させる。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。 ②調査研究成果の発信 3)ウェブサイトの充実
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（主任研究員）、石灰秀行（主任専門職）、武藤明子（アソシエイトフェロー）、安岡みのり、横尾千穂、高階郁美（以上、研究補佐員）	

【年度実績と成果】 5年度は4年度に引き続き、文化財情報の文化財保護への活用という視点からの調査研究及びデータベースの構築、文化財情報の利用及び発信のための一層の環境整備を実施した。 ○調査研究及び成果公開 ・文化財情報及びデータベースとその活用に関連する調査研究を実施、主に当研究所でのデータベース構築、改修及び活用に関して学会などでの発表を行った。 ○情報蓄積・発信機能の強化 ・4年度に引き続き、ウェブサイトのウェブアクセシビリティ対応を進めた。また、X線フィルム画像データベースなどの新規ウェブ公開、及び既存データベースへのデータ追加を実施するとともに、文化財アーカイブズ研究室及び近・現代視覚芸術研究室と連携、データベース管理システムOracleによる所内データベースを適宜改良し利便性を高めた。 ・初の試みとして、5年度は総合検索と国立文化財所蔵品統合検索システムColBaseとのデータ連携を行った。具体的には、「ガラス乾板データベース」の当研究所所蔵ガラス乾板の画像及びメタデータで、東京、京都、奈良及び九州の国立博物館所蔵作品に関するものをColBaseに掲載した。またJapan Searchとの連携を開始し、昭和初期の調査写真データベースを公開した。 ・X（旧Twitter）及びFacebookによる情報発信を適宜実施した。 ○ネットワーク環境の整備・充実 ・各職員の端末を含むネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を実施、職員からのネットワーク利用に関する相談に応じ、情報システムセキュリティの確保に努めた。また職員の端末のActive Directoryへの参加を進め、個別認証機能を強化した。 ・所外持出端末の環境設定、VPN接続のための機器更新及び二要素認証システムの構築など、テレワークのための環境を整備した。	
---	--



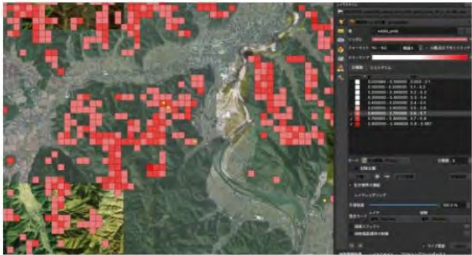
Japan Search の画面

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】 当研究所のウェブサイトは内製で、データベースも職員が独自に制作、開発しており、即応性が高く、効率的な情報発信を実現している。5年度はウェブサイトについて、公的機関の責務とされるウェブアクセシビリティに配慮したデザインへの変更をさらに進めることができた。ウェブデータベースに関しても、データベースの新規公開、既存のデータベースのデータ件数増といった従来の取組みに加え、ColBaseと総合検索とのデータ連携など新たな取組みを実施した。また、データベース構築や改修、活用の事例の学会等での報告を通じて成果を発信することができた。さらに、出張や在宅勤務のため所外で機構ネットワークの利用を必要とする職員向けのVPN利用環境の整備、端末のActive Directoryへの参加による個別認証機能の強化など、利便性とセキュリティを両立させるネットワーク機能の改善を行うことができた。そのため、所期の計画のとおり、順調に事業が推移していると判断した。		
【目標値】 文化財に関するデータベースのアクセス件数:2,679,886件	【実績値・参考値】 ①（実績値）データベースのアクセス件数 3,960,204 件 ②（参考値）データベースのデータ件数 1,839,957 件 ③（参考値）発表 4 件	定量評価 A
・小山田智寛「デジタルデータの長期保存について」文化財情報資料部研究会、6月27日 ・小山田智寛「「売立目録デジタルアーカイブ」の活用とシステムの改修について」2023年度アート・ドキュメンテーション学会第16回秋季研究集会、10月28日 ほか2件		

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の目標を達成できている。6年度以降も、文化財情報の文化財保護への活用のための研究及び研修を行い、所内他部局とも連携して研究の実施・成果発信のための文化財情報データベースを一層充実させ、情報システムの整備を実施する。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 1) 国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、各種データベースを横断的に検索する総合検索を充実させる。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（主任研究員）、畠 素妍（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、楊雅琲（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、Dudko, Anastasiia（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】	
- 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている報告書抄録、報告書の各データベースに関して、データを入力・更新した。公開データベースを更新した。 - 文化財総覧 WebGIS にて搭載されているデータをもとに文化財（国宝・重要文化財の建造物）を対象に被災リスクを GIS 分析した。結果、浸水想定区域あるいは土砂災害警戒区域にかかる件数は、2585 件のうち、656 件にリスクがあることが判明した。メディアにて全国報道され、国会（第 212 国会参議院国土交通委員会、令和 5 年 11 月 9 日）においても取り上げられた。 - 文化財情報データベースが保持している大規模データをもとに、AI を活用した新たな遺跡の発見手法を開発した。メディアにて全国報道され、今後の調査方法を革新するものとして全国的に反響があった。 - 追加した新機能は以下の通り ○全国遺跡報告総覧 - 報告書種別の細分化 - 全国文化財目録の公開 - デジタルライブラリー・データリポジトリの公開 ○文化財総覧 WebGIS - 地すべり地形分布図日本全国版を追加 - 広島県・岡山県・愛媛県・長野県・高知県・福島県・熊本県・大分県・栃木県・兵庫県(50cm)・高知県の CS 立体図を追加 ○全国文化財情報デジタルツインプラットフォーム - 新たに文化財の 3D モデルを追加	
	
AI 分析：古墳存在予測スコア	

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

これまでに蓄積した文化財情報をもとにハザードマップ分析した結果は、全国報道されるなど広く社会的に注目され、国会においても取り上げられた。地道に膨大な文化財情報を蓄積した取り組みの結果である。また、膨大なデータをもとに AI を活用した遺跡踏査の取り組みにおいても、広く社会的関心を引き起こし、新たな手法の創造として全国の自治体からも照会が相次いだ。ナショナルセンターならではの大きな視点かつ最新技術での研究成果となった。

研究成果の統合プラットフォームとしての文化財デジタルライブラリー・文化財データリポジトリは、印刷物中心の媒体からデジタル時代への次世代プラットフォームとなるものであり、機械可読のデータ群は次なる AI 高度利用を可能にする基盤となるものである。データ登録については 5 年度も文化庁から地方自治体へ周知されたことで継続して協力があり、大規模なデータベースの維持に努めるとともに、確実なデータ提供を行った。公開データベースのアクセス件数は 4 年度比 166.2%であった。

定量評価の目標値を達成したうえで、内容豊かなデータベースとして著しく発展しており、またナショナルセンターとして研究成果の社会への還元も行うことができたため、全体の評定を A とした。

【目標値】	【実績値・参考値】※（）内は、4 年度の数値	定量評価
・文化財に関するデータベースのアクセス件数：11,612,614 件	(実績値) 公開データベースへのアクセス件数 15,491,094 件 (9,955,544) (参考値) 公開データベースの件数 35 件(35) 公開データベースの一例：全国遺跡報告総覧 登録データ件数 436,328 件(421,300) 年間ダウンロード件数 3,091,019 件 (2,348,202) 年間ページ閲覧数 138,132,833 件 (117,834,000) 論文発表 23 件（ア） 口頭発表 7 件（イ） 刊行物 33 件（ウ）	A

ア) 論文 高田祐一他「Following the Thread: Integrating SORAN's Japanese Dataset into ARIADNE」他計 23 件

イ) 研究発表 高田祐一「航空レーザー測量データを活用した遺跡の探し方」他 7 件

ウ) 刊行物 『デジタル技術による 文化財情報の記録と利活用 6』他 33 件

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	文化財デジタルライブラリー・文化財データリポジトリは、新たな統合プラットフォームとしての基盤となる。従来の報告書の作成から公開までのフローを、新プラットフォームでワンストップサービスとして可能にすることから、劇的な効率化と低コスト化を図ることが可能になる。さらに蓄積された情報は、AI 利用に適したデータ形式となるため、さらなる高度利用が可能になるという好循環となる。ただしまだ試行版であるため、6 年度にブラッシュアップを図る。データベースのアクセス件数は、目標値を大きく上回った。また、全国遺跡報告総覧のページ閲覧数は 4 年度比で 17%増加しており、認知度や利用頻度が高まっている。以上より、今後中期目標を上回る成果が見込まれると判断し、A 評価とした。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-2)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 2)文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究を行う。データの長期保管及び公開活用に関して、技術面・法律面を含めたガイドラインを作成する。また、文化財報告書に関する総目録を作成する。
プロジェクト名称	文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）、絹川桂（文化財情報係主任）三谷直哉（文化財情報係、文化財情報研究室研究員）	

【年度実績と成果】

○公開活用に関する法律研究

文化財位置情報のオープン化をテーマに各地の文化財担当者と弁護士とともに検討会を開催した。検討会の内容については原稿化を実施し、さらに知的財産権や権利処理などの論考も合わせて第40冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用6』にて掲載した。

○発掘調査報告書総目録及び建造物調査整備報告書総目録の刊行

文化財報告書のアーカイブの基礎情報となる総目録を5年度に29都道府県分刊行した。以前に刊行した5府県分を合わせ34都道府県分となった。また、建造物調査整備報告書総目録を刊行した。

○文化財デジタルアーカイブ課程フォローアップ調査&意見交換会の開催

過去に奈良文化財研究所の文化財担当者研修「デジタルアーカイブ課程」を受講した自治体担当者を対象に、文化財デジタルアーカイブの現状調査とオンラインによる意見交換会を開催し、実際の現場での課題やニーズを収集した。今後のデジタルアーカイブに関する施策の基礎資料となる。

○文化財データリポジトリの公開

6年1月、研究データを収集・管理・保存するためのデータリポジトリサービスを開始した。

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

文化財コンテンツを電子化及びインターネット公開するには、知的財産権の理解と整理は不可欠である。5年度では、法律専門家と検討したことで、今後のデジタルアーカイブ事業の法律面についての懸念事項を解消できた。これにより、平成30年著作権法改正の新条項「デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定」を活かし、積極的にデジタルアーカイブ事業を推進させることができるようになった。また、文化財デジタルアーカイブ課程フォローアップ調査&意見交換会では、自治体文化財担当者の実際に抱える課題やニーズを収集するとともに情報交換を実施した。優良事例を収集できたことで、今後のデジタルアーカイブ事業に資することができる。

さらに、文化財データリポジトリは、研究データの可視性・アクセス性・保存性・再利用性の向上を見込め、蓄積型学問となる文化財分野において、今後、重要なプラットフォームとなる。こうした文化財データリポジトリの開発工程を見直し、迅速化に努めた結果、前倒しとなる5年度の公開が可能となった。以上から、A評価とした。

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値)	定量評価
	研究報告書刊行数：1件（ア） 文化財目録刊行数：30件 知的財産権関連論考：3件 意見交換会：2回	—

ア) 奈良文化財研究所研究報告第40冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用6』（6年3月）

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財に関連する情報・資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。 ①文化財情報基盤の整備・充実 文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	文化財に関するデジタルアーカイブ拡充のためには、法律研究やデータの長期保管・活用等の調査研究が前提となる。とりわけ法律面での研究は全国的に少なく、本プロジェクトにおいて作成してきた実践に役立つ一連のテキストは、全国の文化財関係機関において参考にされ、自治体等におけるデジタルアーカイブ化の取り組みを支援するものとなっている。また報告書の総目録作成は、報告書の全体把握に不可欠であるものの、これまでは存在していない。全体把握はアーカイブ化の前提となるものである。5年度は、その発掘調査報告書及び建造物調査整備報告書の目録整備を全体の62.5%まで完了させることができ（4年度は10.4%）、大幅に推進させた。 これらの点により、ナショナルセンターとしての役割を一層強化し、学術分野及び社会に貢献する大きな成果があったことから、今後、中期目標を上回る成果が見込まれると判断し、Aと判定した。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①3)・4)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 3) 調査研究及び文化財防災に役立つデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。 4) 文化財に関する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	○橘川英規（文化財アーカイブズ研究室長）、江村知子（文化財情報資料部長）、米沢玲（主任研究員）、田代裕一朗（研究員）、阿部朋絵、寺崎直子、鈴木良太（以上、研究補佐員）ほか	

【年度実績と成果】

○全所的な文化財情報の発信

・当研究所副所長を委員長とするアーカイブ WG を例年通り 4 回（6 月 28 日、9 月 21 日、12 月 14 日、6 年 3 月 18 日）開催し、アーカイブの拡充と積極的な情報発信を行うための協議を行った。

○文化財研究のためのデータ蓄積と公開

・当研究所が撮影した X 線フィルムのデジタル画像（約 4,150 点）のデータベースを資料閲覧室で公開した。（4 月 3 日）

・韓国・国立中央博物館、国立慶州博物館、国立晋州博物館、成均館大学校博物館、ソウル大学校博物館を往訪し、アーカイブ関連研究者と戦前の文化財調査写真に関する研究協議を行った。（5 月 18～19 日、12 月 19 日～21 日）

・雑誌『國華』掲載作品図版を資料閲覧室で追加公開した（追加公開：400 号～、既出：800 号～1200 号）。（6 月 5 日）

・香取秀真旧蔵資料の目録を当研究所ウェブサイトにて公開し、資料閲覧室での閲覧提供を本格的に開始した。（7 月 27 日）

・韓国において戦前の文化財調査写真に関する調査を行った（国立中央博物館、国立中央図書館）。（9 月 24～25 日）

・松島健旧蔵資料を受け入れ、その目録情報を当研究所ウェブサイトにて掲載、これを資料閲覧室にて公開した。（9 月 26 日）

・韓国・国外所在文化財財団の助成を受けて、資料閲覧室が所蔵する韓国絵画調査資料のアーカイブ化を行った。

・日本民藝館が所蔵する近代資料のアーカイブ研究書を共著で刊行した。（12 月 26 日）

・長期的・安定的な資料収集のためアーカイブ増床・保存環境適正化を目的とした書庫等の整備を行った。（12 月～6 年 3 月）

○アーカイブを利用した研究・外部機関との協力

・当研究所所蔵資料を武井武雄展（県立神奈川近代文学館）、イン・ビトウィーン展（埼玉県立近代美術館）に貸し出した。

・国内外の大学・大学院学生や専門家などを対象とした資料閲覧室の利用ガイダンス等を行った（4 月 12 日青山学院大学大学院、9 月 1 日韓国伝統文化大学校、10 月 16 日学習院大学、10 月 28 日アート・ドキュメンテーション学会）。

○資料閲覧室の運営・管理・資料受け入れ数：4～10 月は節電のため、12～6 年 3 月は書庫工事のため、変則的な開室としたが休室せずに利用者のニーズに対応した。（4.3～6.21：週 2 回月・水、6.22～10.5：週 3 日月・水・木、10.11～6.3.30：週 3 日、月・水・金〔うち、12.18～6.3.30 は機能縮小開室〕）・閲覧室利用状況：公開日総数 129 日・年間利用者合計 628 人 図書等の受け入れ和漢書 1,328 件、洋書 34 件、展覧会図録・報告書等 1,312 件、雑誌 3,656 件（合計 6,330 件）



学習院大学学生へのレクチャー(10月16日)

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

専門性の高い資料収集を積極的に収集するとともに、短期間で、その情報や資料をウェブサイトや資料閲覧室で公開した（雑誌『國華』掲載作品図版：約 2,000 件、松島健旧蔵資料：約 500 件など）。またこれまで外部からのアクセスが容易でなかった所蔵資料の情報をウェブサイトにて公開した（X 線フィルムデータベース、香取秀真旧蔵資料など）。さらに文化財調査写真という共通のテーマにより、他機関との連携を進めた。

このように、着実に研究計画を進捗させるとともに、特殊要因として 5 年度に計上された予算により、従来に比べ 1.8 倍の収容能力となる書庫等のアーカイブ増床を行い、当分の間、資料の増加に対応できる収容力を確保することができた。

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) ・論文 4 件（ア～エ）	定量評価
		—

ア 米沢玲「展覧会評 上原美術館「無冠の仏像」—文化財の指定とその価値をめぐって—」『美術研究』440、8 月

イ 田代裕一朗「朝鮮初訪問時の蒐集品をめぐって」ほか 1 件『柳宗悦の心と眼—日本民藝館所蔵朝鮮関連資料をめぐって』（東京藝術大学出版会、12 月）

ウ 田村彩子「東京文化財研究所年史資料公開に向けての記述編成」『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』20、6 年 3 月

エ 江村知子「研究ノート：遊楽図へのまなざし—徳川美術館蔵「遊楽図屏風」の細部表現について」『美術研究』442、6 年 3 月

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	オンラインを活用して公共性と専門性の双方を有する運営を進めることができた。中期計画の 3 年目として、文化財調査研究・成果の集約、データベースの継続的拡充はもとより、専門的アーカイブの効果的な活用を推進するための枠組み（資料閲覧室利用ガイダンス、レクチャー、見学会など）を含めた総合的なアーカイブ活動を行い、中期計画を順調に遂行できていると評価した。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-4)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集。整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 4)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○山上徹（連携推進課長）、絹川佳（文化財情報係主任）、伊藤久美（事務補佐員）、山内章子（事務補佐員）、中西晶子（事務補佐員）、永岡美和（事務補佐員）、志賀明美（事務補佐員）、工藤亜矢（事務補佐員）、松永 由理（事務補佐員）	
【年度実績と成果】		
○資料の収集・整理・保管・提供 収集・整理・保管については、例年どおり滞りなく実施した。提供については、閲覧環境保持のため一般利用の人数制限及び利用時間の制限は設けた上で、来館者の安全性と利便性の向上に努めた。 また、寄贈図書の受け入れに関しては、整理、公開、提供への対応を実施中である。 購入図書 408 冊／寄贈図書 4,961 冊／雑誌 2,355 冊 一般利用者 183 人／利用冊数 2,429 冊／来館者複写件数 167 件 遠隔利用：複写受付件数 384 件／貸借受付件数 209 件		
○データベースの構築・運用		
①構築：他組織（産総研）との共同で「全国文化財情報デジタルツインプラットフォーム：3D DB Viewer」の本格公開に対応した。		
②運用：定期的な OS パッチ適用、OS ログの確認等を行った。 ＜障害＞ 0 件 ＜データ登録＞奈文研刊行物および 3D データについて、「学術情報リポジトリ」「全国遺跡報告総覧」「3D データデータベース：Sketchfab」へ登録した。		

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】		
図書資料室の利用に関して、ウェブサイトにおいて予約フォーム及び予約状況カレンダーを設置し、利用状況を随時公開することで、一般利用者の利便性向上を図るとともに、業務の効率化を進めることができた。また、インターネットが利用できない利用者に向けて電話予約等も受け、幅広い利用者への対応に務めた。さらに、遠隔利用については業務整理を行い、研究所内外の利用者に対して円滑に資料提供を行うことができた。 研究成果の発信の場であるデータベースの運用にあたっては、適宜障害対策等を行った結果、5 年度はトラブルによる停止等の障害は発生しなかった。また、データベースの新規公開や研究成果を広く発信するため、ウェブサイト上での広報等を行った。以上の理由から、計画を順調に実施できたと判断し、B 評価とした。		
【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値)	定量評価
	・資料閲覧室・図書資料室の開室日数 146 日 ・資料閲覧室・図書資料室の利用者数 183 人 ・文化財に関する資料・図書等の総件数 730,580 件	—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関連する情報・資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。 ①文化財情報基盤の整備・充実 文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	中期計画に掲げた目標の一つである資料の収集において、調査・研究のための二次資料の収集が 4 年度に引き続き、予算削減等の理由により困難をきたしているものの、各自治体が発行する調査報告書は従来どおりに収集・整理・保管・提供を行うことができた。また、5 年度は他組織との共同研究等での新たな側面からのデータベース発信を積極的に行うことができ、中期計画の 3 年目として十分な成果を得たといえる。6 年度以降も文化財に関する電子化でのアーカイブの拡充を継続的に行っていく。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイト充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1) 定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』 ・『東京文化財研究所概要』 ・『東文研ニュース』 ・『美術研究』（年3冊） ・『日本美術年鑑』 ・『無形文化遺産研究報告』 ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』 ・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○齊藤孝正（所長）	
【年度実績と成果】		
・『東京文化財研究所年報』2022 年度版 ・『東京文化財研究所概要』2023 年度版 ・『東文研ニュース』年 1 回(80 号) ・『美術研究』（440 号・8 月、441 号・12 月、442 号・6 年 3 月） ・『令和 3 年版 日本美術年鑑』（10 月） ・『第 16 回 東京文化財研究所 無形文化遺産部 公開学術講座 「無形文化財と映像」 報告書』（11 月、6 年 1 月ウェブサイト公開） ・『無形文化遺産部研究報告』18 号(6 年 3 月) ・『第 18 回無形民俗文化財研究協議会報告書』（6 年 3 月） ・『保存科学』63 号(6 年 3 月)		
日本美術年鑑 2021 東京文化財研究所 『令和 3 年版日本美術年鑑』 Tobunken News 2021 年 80 『東文研ニュース』80 号		

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】		
『美術研究』は毎年 3 冊を継続的に刊行しており、440～442 号の 3 冊に、論文 5 件、研究ノート 3 件、展覧会評 2 件を掲載した。当研究所の研究員だけでなく、外部の研究者による最新の研究論文を掲載したほか、韓国の研究者による論文を日本語に翻訳して掲載し、東アジア美術の最新の研究動向を紹介することができた。また光学調査によって得られた多種多様な画像や彩色材料分析結果などを含めた美術史の研究論文を発表し、当研究所の人文科学・自然科学の研究者の連携協力による独創的な研究成果を公表することができた。 『無形文化遺産研究報告』では報文 7 件、資料紹 1 件の計 8 件の論文を掲載し、着実に研究成果の公開を行っている。また『無形民俗文化財研究協議会報告書』では民具の継承をテーマにした適時性のある議論を収録し公開することが出来た。『公開学術講座報告書』では一般に向けた研究成果の公開を適切に果たすことが出来た。 『保存科学』では報文 2 件、報告 7 件、資料 5 件の計 14 件の論文を掲載し、投稿・査読・発刊までを約 3 ヶ月で行い、一般的な学術誌と比べて迅速に成果公開を行っている」と評価した。 また、広報誌『東文研ニュース』はデザインと内容を刷新し、より広く、わかりやすく当研究所の活動について情報発信できるよう、広報活動を推進した。		
【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	・年報、概要、ニュース 各 1 点 ・日本美術年鑑 1 点 ・美術研究 3 点 ・無形文化遺産部研究報告 1 点 ・無形民俗文化財研究協議会報告 1 点 ・公開学術講座報告書 1 点 ・保存科学 1 点	—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	4 年度に引き続き、文化財情報資料部、無形文化遺産部、保存科学研究センターの各プロジェクトの研究成果を反映させた定期刊行物を当初の計画通りに刊行することができた。専門性の高い学術誌としての水準を保ちながら、当研究所の研究・事業内容をひろく一般に知っていただくために論文等をリポジトリでウェブ公開を行った。継続的に最新の研究成果をまとめた刊行物を発行し、情報発信を行ったこと、また冊子体とあわせて機関リポジトリに国内外からアクセスされ、利用されていることを評価した。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)2)3)	②調査研究成果の発信 1) 定期刊行物の刊行 ・『奈良文化財研究所紀要』・『奈良文化財研究所概要』・『奈文研ニュース』・『埋蔵文化財ニュース』 2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講演会・現地説明会 3) ウェブサイトの充実 ・なぶんけんブログ等（コラム作寶樓等）
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
奈良文化財研究所	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○山上 徹（連携推進課長）、西川 知延（研究支援課長）、田島章雅（連携推進課課長補佐）、永野陽子（研究支援課課長補佐）、桑原隆佳（連携推進課広報企画係長）、絹川佳（連携推進課文化財情報係主任）、西村沙織、（連携推進課広報企画係係員）新開良子（研究支援課係員）、ほか	

【年度実績と成果】

1) 定期刊行物の刊行

- ・奈良文化財研究所概要 2023 12 月刊行、100 部 ・奈良文化財研究所紀要 2023 8 月刊行、2,300 部
- ・奈文研ニュース「No.89」6 月、「No.90」9 月、「No.91」12 月、「No.92」6 年 3 月、各 2,200 部

2) 現地説明会等

- ・日高山瓦窯の発掘調査（飛鳥藤原第 213 次調査）現地見学会
開催日：7 月 1 日 於 橿原市上飛驒町（参加者 381 人）
- ・法華寺旧境内・海龍王寺旧境内の発掘調査（平城第 656 次調査）現地見学会
開催日：10 月 5 日 於 奈良市法華寺町（参加者 14 人）
- ・平城京左京三条一坊二坪の発掘調査（平城第 658 次調査）現地見学会
開催日：6 年 1 月 27 日 於 奈良市（参加者 679 人）
- ・石神遺跡の調査（飛鳥藤原第 214 次調査）の現地見学会
開催日：6 年 3 月 2 日 於 奈良県高市郡明日香村飛鳥（参加者 747 人）

3) 講演会

- ・都城発掘調査部創設 60 周年記念第 128 回公開講演会「よみがえる西大寺金堂院」
開催日：6 月 10 日 於 平城宮跡資料館講堂（来場者：218 名）
- ・都城発掘調査部創設 60 周年記念第 129 回公開講演会「まぼろしの尼寺西隆寺」
開催日：11 月 11 日 於 平城宮跡資料館講堂（来場者：185 名）
- ・都城発掘調査部創設 60 周年記念西大寺特別公開講演会「奈良時代の西大寺」
開催日：12 月 9 日 於 奈良市西部会館市民ホール（来場者：198 名、オンライン参加者：52 名）

4) シンポジウム

- ・国際シンポジウム「考古学マスメクトロメトリーが明かす古代の食」
開催日：4 月 2 日 於 同志社大学今出川キャンパス（参加者 29 名、オンライン参加者 1 名）
- ・文化的景観研究集会（第 11 回）山の風景史 ― 育成林のとらえ方とその保全 ―
開催日：9 月 1 日 於 奈良文化財研究所 大会議室（参加者：38 名、オンライン参加者：105 名）
- ・第 27 回古代官衙・集落研究集会「古代集落の構造と変遷 4」（古代集落を考える 4）
開催日：12 月 16 日 於 平城宮跡資料館講堂（参加者 50 名、オンライン参加者：97 名）
- ・国際シンポジウム「ウクライナの戦災文化財をどのように保護するか」
開催日：6 年 1 月 15 日 於 東京文化財研究所（参加者 38 名、オンライン参加者 2 名）
- ・第 23 回古代瓦研究会シンポジウム
開催日：6 年 2 月 3 日、4 日 於 平城宮跡資料館講堂（参加者 132 名、オンライン参加者：65 名）

5) ウェブサイトの充実

- ・「なぶんけんチャンネル」において、5 年度は新たに 16 本の動画を公開し、チャンネルの開設から現在までに 119 本の動画を公開している。巡訪研究室、コラム作寶樓も引き続き公開した。（視聴数（オンライン）：89,669 件）

年度計画評価

B

【評定理由】

当研究所における調査研究成果を適時に刊行し、現地見学会や講演会開催の情報についてウェブサイト及び Twitter 上に公開し情報発信を行い、速やかに新たな調査研究成果を発信することができた。3D に関するデータベースの拡充や、他研究機関との共同研究としてのデータベースも増え、また、多様なブログ、コラム等を更新することによりウェブサイトの内容を充実させた。また、定期刊行物、講演会、ウェブサイト公開などは、当初の計画通りに実施し、滞りなく提供を行うことができた。さらに、講演会等は、都城発掘調査部 60 周年を記念した講演会を 3 公演開催し、12 月 9 日開催の「奈良時代の西大寺」については、奈良市西部会館市民ホールにて開催したことで、一般に向けて広く研究成果の発信に取り組むことができた。

以上の理由から、B 評価とした。

【目標値】**【実績値・参考値】**

(参考値)

- ・定期刊行物等の刊行件数 6 件 ・講演会等の開催回数 12 回
- ・講演会等の来場者数 2,709 人、オンライン配信者数 322 人
- ・学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数 7,589 件

定量評価

—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関連する情報・資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。 ②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	定期刊行物及びウェブサイトにおいては調査研究の成果等を公表するものとして、計画通り順調に刊行や更新ができた。都城発掘調査部創設 60 周年記念講演会「奈良時代の西大寺」については、広く一般に向けて研究成果を発信するため、奈良市西部会館市民ホールにて開催し、多くの来場者及び配信視聴者を得ることができた。以上を含めて、今中期計画期間の 3 年目として、6 年度以降の中期計画遂行における基盤となる事業を実施できたと判断し、B と評価した。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトも充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○安永拓世（広領域研究室長）、黒崎夏央（アソシエイトフェロー）ほか	

【年度実績と成果】

○10月20日（金）、21日（土）の2日間、一般から聴講者を募集し、オープンレクチャーを開催した。5年度は、中期計画の3年目にあたり、大テーマは4年度と同じく「かたちを見る、かたちを読む」とした。また、4年度までは、新型コロナウイルスの感染防止を考慮し、内部講師2名のみによる1日間の開催としていたが、今年度からは、コロナ禍前の開催状況に戻し、外部講師2名と内部講師2名による2日間の開催とし、聴講者定員も50名から100名に増やした。

○講演テーマは次の通りである。

10月20日（金）

- ・小野真由美（文化財情報資料部 日本東洋美術史研究室長）「西洞院時慶の庭—長谷川派の藤花図屏風をめぐる—」
- ・春木晶子氏（江戸東京博物館 学芸員）「アイヌの肖像画「夷酋列像」にこめられた国家守護の願い」

10月21日（土）

- ・橘川英規（文化財情報資料部 文化財アーカイブズ研究室長）「画廊資料」をいかに残し、活用するか」
- ・岡村幸宣氏（原爆の図丸木美術館 学芸員・専務理事）「原爆の図」の歴史をつなぐ」

○両日合わせて、外部からの聴講者139名を得た。



講演風景（春木）



講演風景（岡村）



広報チラシ

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

5年度は、コロナ禍前の開催状況に戻し、限定的な抽選ではなく、応募者全員を受け入れることができた。講演内容については、江戸時代の絵画作品に関する新知見や新しい解釈を紹介したほか、一般の聴講者にとっては、より身近な存在である近現代の作品や資料について、その活用や継承のあり方を、動画などを通して提示することで、親しみやすく、わかりやすい講演となった。

参加者からのアンケート結果では、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせて86%の回答を得た。なお、オープンレクチャーは、当研究所において60年以上にわたり継続して開催しているもので、5年度も最新の研究成果を、一般聴講者により広く発信し、事業を継続することができた。

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) 講演会の開催 2日間、講演4件	定量評価
		—

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	5年度は、今期中期計画の3年目にあたり、オープンレクチャーのテーマとしては「かたちを見る、かたちを読む」と今期中期計画に一貫したもののだが、5年度の、外部講師2名、内部講師2名による発表は、作品の「かたちを見る」ことに基盤を置きつつ、資料に登場する作品の文字による記録や、作品への新たな解釈によって「かたちを読む」ことの魅力を紹介し、さらに、「見られ」「読まれた」「かたち」を、次の世代に伝えていくことの重要性を示した点で、参加者からも好評を得た。また、今中期計画期間において、初めて外部講師を招いてオープンレクチャーを開催し、参加者の満足度も高かったことが評価できる。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。1) 特別展・企画展
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部・飛鳥資料館・都城発掘調査部（飛鳥・藤原）	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○岩戸晶子（展示企画室長）、小原俊行（展示企画室研究員）、吉野綾子（展示企画室アソシエイトフェロー）、○石橋茂登（飛鳥資料館学芸室長）、清野陽一（同主任研究員）、竹内祥一朗（同研究員）、濱村美緒（同アソシエイトフェロー）、○箱崎和久（都城発掘調査部長）、岩永玲、谷澤亜里（以上、同研究員）ほか	

【年度実績と成果】

(1) 平城宮跡資料館

- ・春期ミニ展示「よみがえる西大寺金堂院」（5月27日～7月17日、45日間、4,356人）
- ・夏期企画展「イカロスの翼」（7月22日～10月1日、61日間、5,468人）、関連イベント「子ども模型飛行機教室」開催（参加者13人）、ギャラリートーク5回開催（参加者のべ64人）、夏休み子ども質問会2回開催、公式YouTubeチャンネルで解説動画の公開（再生回数1,826回）
- ・秋期特別展・都城発掘調査部創設60周年記念「女帝のいのりー発掘された西大寺と西隆寺ー」（10月28日～2月12日、85日間、10,341人）

- ・X（旧Twitter）を用いて、積極的に平城宮跡及び資料館の広報に取り組んだ（Post数133件）。



飛鳥資料館 秋期特別展

(2) 飛鳥資料館

- ・ミニ展示「長法寺十三重石塔内に納められた押出三尊仏像と御正体」（4月21日～5月21日 28日間、3,288人）
- ・夏期企画展「第14回 写真コンテスト作品展『飛鳥のくらし』」（7月14日～9月18日 59日間、2,936人）応募95点。関連イベント「日光写真をつくろう」4回実施、参加30名。
- ・秋期特別展「川原寺と祈りのかげら」（10月6日～12月10日 57日間、6,919人）
- ・企画展「飛鳥の考古学2023」は光熱水費高騰に伴う予算削減というやむを得ない事情により中止した。これに対する代替企画として、ウォークイベント「奈文研研究員と歩く飛鳥」を4回実施し、各回15名の定員に対して16～20名の応募があり、参加者からは好評を得た（6年2月7・17日、3月13・23日）。

(3) 藤原宮跡資料室

- ・常設展示に加え、ロビーにて「日高山瓦窯の瓦」（7月1日～6年3月31日）を実施。なお、常設展示内容の一部を更新した。

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

定量評価は、平城宮跡資料館では、特別展・企画展満足度アンケート88%、飛鳥資料館では、86.5%であった。平城宮跡資料館では、都城発掘調査部と連携しYouTube 動画配信を積極的に行い、春期ミニ展示および秋期特別展関連を7本、夏期企画展関連を1本配信した。また、常設展も満足度アンケート94%と高い満足度を得た。飛鳥資料館では、写真コンテスト展示は14回目となり、応募点数・来館者数とも安定的といえる。秋期特別展は考古学・美術史学で著名な資料ながら公開の機会が少ない川原寺裏山遺跡出土品を多数紹介したことで、学術面でも意義のある展示となった。当初計画していた企画展1件がやむを得ない事情により実施できなかったものの、これに対する代替企画として、当初計画になかったウォークイベントを4回実施し、近年の調査研究成果をふまえた解説を現地で行うことにより、展示施設の観覧とは異なる経験を通して飛鳥資料館・飛鳥地域の魅力を伝えることができた。以上の理由からB評価とした。

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
(1) 平城宮跡資料館 特別展・企画展満足度アンケート90% (2) 飛鳥資料館 特別展・企画展満足度アンケート85%	(実績値) (1) 平城宮跡資料館特別展・企画展満足度アンケート88% (2) 飛鳥資料館企画展満足度アンケート86.5% (参考値) (1) 平城宮跡資料館入館者数35,295人、開館日数305日、刊行物発行実績2件（ア・イ）、特別展・企画展2回 (2) 飛鳥資料館 入館者数22,096人、開館日数307日、刊行物等発行実績1件（ウ）、特別展・企画展など4回 (3) 藤原宮跡資料室 入館者数7,506人、開館日数353日。	B
ア) 夏期特別展「イカロスの翼」図録（A4版 フルカラー 24頁 7月22日発行） イ) 秋期特別展・都城発掘調査部創設60周年記念「女帝のいのりー発掘された西大寺と西隆寺ー」図録（A4版 フルカラー 24頁 10月28日発行） ウ) 飛鳥資料館図録第76冊『川原寺と祈りのかげら』（B5変形判フルカラー56ページ 10月6日発行）		

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関連する情報・資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。 ③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。
評定理由	5年度は、都城発掘調査部の創設60周年に当たり、平城宮跡資料館では都城発掘調査部と連携した展示・広報を行い、展示関連の8本の動画配信を行った。各館ともSNSやホームページを活用した情報発信を積極的に行い、刊行物への掲載等による広報に加え動画配信を行うなど、取り組みを強化した。飛鳥資料館では、秋期特別展において学界では著名な資料でありながら全貌が公表されていない川原寺裏山遺跡出土品について、資料調査を踏まえて資料展示と近年の研究成果を公開した点で研究機関としての役割を果たした。また、グラフィックデザインやイラストでの解説を交えたビジュアル性の高い展示によって、会場の魅力を高めるとともに観覧者の理解を促す工夫を行った。満足度アンケートについては、いずれも目標値に到達した。飛鳥資料館において当初計画していた企画展示がやむをえない事情により実施できなかったものの、その代替企画として研究員と飛鳥地域を歩くという新たな企画を実施し、学術的成果を実地で学ぶ機会を設けて飛鳥資料館の魅力を高めるとりくみを行った。以上のことから、中期計画としては順調に進められていると判断し、B評価とした。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 2)定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○山上 徹（連携推進課長）、田島章雅（連携推進課課長補佐）、桑原隆佳（連携推進課広報企画係長）、岩井靖子（連携推進課事務補佐員）	

【年度実績と成果】

1) 解説ボランティアに関する会議

- ・平城宮跡解説ボランティア懇談会の開催（研究部と事務局が一体となったボランティア活動を検討する会議、議題がある場合に開催 計7回開催）
- ・平城宮跡解説ボランティア連絡会議の開催（解説ボランティア班長と当研究所職員によるボランティア活動の確認、活性化、改善等を検討するための会議、毎月1回、計11回開催）
- ・平城宮跡歴史公園ガイド連絡協議会（NP0 法人平城宮跡サポートネットワーク、奈良県（平城京魅力創造プロジェクト_市）、国交省（平城宮跡管理センター）、当研究所の4者で行う国営飛鳥歴史公園内のボランティア活動等の情報共有、意見交換を行う会議：2か月に1回、計6回開催）

2) 平城宮跡解説ボランティア感謝状授与式及びボランティア交流会の開催

- ・平城宮跡解説ボランティア第3期生が活動開始20周年を迎えたことを記念して、第3期生の方に感謝状を授与式を開催した。また感謝状授与式終了後、奈良文化財研究所の職員及びボランティアの方々との意見交換の場としてボランティア交流会を開催した。



第3期生感謝状授与式

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

解説ボランティアへ向けた当研究所による最新の情報提供、ボランティアからの改善等の意見を随時取り入れるため組織した「平城宮跡解説ボランティア懇談会」を定期的に開催し、ボランティア活動の方向性等について意見交換をおこなった。また、4年度の当研究所の研究成果を記載している「奈良文化財研究所紀要2023」を全ボランティアに配布し、解説ボランティアの資質向上を図った。また、ボランティア連絡会を開催することにより、ボランティアの方々と意思疎通を図ることができた。

平城宮跡解説ボランティア第3期生の活動開始20周年を記念した第3期生への感謝状授与式を開催した。また授与式終了後、研究所職員とボランティアとの意見交換の場としてボランティア交流会を開催し、ボランティアの育成とモチベーションの更なる向上を行うことができた。

以上のことから、本事業を推進していると考えられB評価とした。

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	(参考値) ・解説ボランティア登録人数：112人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：40,393人 ・解説活動日数：280日	—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、「新しい生活様式」を踏まえつつ、解説ボランティアを育成し、その活動を支援する
評定理由	ボランティア連絡会議、第3期生感謝状授与式及びボランティア交流会を開催し、ボランティアの育成並びにモチベーションの維持向上、そして意思疎通を図ることができた。これらの活動は、4年度以降の中期計画を進めるうえでの基盤になるものである。以上の理由から、5年度も中期計画を順調に進められたと判断し、B評価とした。